

中部山岳地域の高山植物相における分布型組成

平尾章(筑波大学菅平高原実験センター)

日本列島の高山植物相は、単に北方地域に起源する植物種だけではなく、さまざまな地理的な分布パターンを背景にもった種から構成されている。清水(1983)の分布型組成分析に基づくと、日本の高山植物相は1)汎世界要素、2)周極要素、3)アジア要素、4)太平洋要素、5)低山要素、6)純日本要素に大別される。本研究では、被子植物を対象として、近年の植物分類学や植物地理学の知見に基づいて、分布型組成リストを見直した上で、北海道、東北、中部山岳の3地域および中部山岳内の主要な4山系(飛騨山脈、木曾山脈、赤石山脈、八ヶ岳)毎に出現する種および固有種の分布型組成を新たにまとめ、比較検討をおこなった。

植物種のリストは清水(1983)および清水(2002)にリストアップされたものに、近年あらたに同定された種を加え、Y-List(米倉・梶田 2003-)に基づいて、種・亜種・変種などの見直しをおこなった。次に植生誌などの各種文献に基づいて、北海道、東北、中部山岳の3地域および中部山岳内の主要な4山系別に出現する種の有無を調査した。要素区分については、GBIF(Global Biodiversity Information Facility)やPAF(PanArctic Flora)などのデータベースを用いて、国外の分布パターンの見直しをおこなった。

その結果、日本全体では 525 種の被子植物が高山植物としてリストアップされ、その約 7 割の 387 種が中部山岳地域に出現した。分布型組成比を、中部山岳、東北、北海道の 3 地域で比較すると、より南方の地域ほど低山要素が増加する傾向が認められた。また北方地域に起源をもつと考えられている周極要素は、北海道が他の地域に比べて若干割合が高い傾向を示した。これらの分布型組成比の傾向は、温暖化が進んだ場合の高山植物の群集構造の変化の方向性を示唆している可能性がある。

